

## 展示記録 「六古窯のはじまりと六古窯以外の中世窯」

### ―陶磁美術館本館 2 階常設展示通史部門日本ゾーン中世コーナーの改編―

小川 裕紀

(愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

#### 1. 本稿の目的

平成 31/令和元 (2019) 年度、愛知県陶磁美術館は「陶磁文化連携発信事業」として、「日本六古窯日本遺産認定事業」「茶摘み体験と愛陶茶会」「生け花展とワークショップ」「出張やきもの体験」「出張ミニ展示会」の 5 事業を実施した。「日本六古窯日本遺産認定事業」ではイベント「日本六古窯トークセッション」(8 月 31 日)と特別展示「六古窯のはじまりと六古窯以外の中世窯」(8 月 3 日-9 月 29 日)を行った。特別展示は常設展示の一部を改編して実施したもので、来館観覧者は撮影自由であったが、教育普及用印刷物を制作しておらず展示の記録となる公刊物がない。そこで、本稿では本展の概要をまとめ、展示記録とする。なお、該当の展示は会期終了後も常設展の一コーナーとして継続している。

#### 2. 経緯

陶磁資料館/陶磁美術館は、古陶磁の歴史を通観する常設展示について、数度のリニューアルを行いつつ継続的に展開してきた。現行の常設展「日本と世界のやきもの」は平成 26 年 10 月に開始されたものである。同展は、本館 2 階第 3 展示室から第 6 展示室にかけて開催しており、大きくは名品部門(第 3 展示室・西室)と通史部門(第 3 展示室・東室-第 6 展示室)に大別される。後者はさらに日本ゾーンと世界ゾーンに分かれ、日本ゾーンでは原始から近現代陶芸(現代については伝統系)に至る通史展示と、古窯陶磁資料展示を実施している。従前の中世コーナー(第 3 展示室・東室の一部)は中世陶器を焼締陶器と施釉陶器に大別して配列し、前者を瓷器系と須恵器系に細分する一方、施釉陶器については近世桃山陶器への接続を重視した展示設計意図であったと思われる。

陶磁美術館では平成 30 年度に猿投窯を扱う特別企画展を開催したことと、平成 31/令和元年度に「日本六古窯日本遺産認定事業」を実施することとなったこと等を契機に、中世展示を大きく改編することとした。なお、平成 26 年 9 月までの常設展示においては、中世陶器は東海地方、北陸地方、近畿地方、西日本といった地方別に展示しており、六古窯については従来からも明示的に紹介していなかった。そこで、今次の展示設計にあたっては、六古窯をひとまとまりとして、明確に表すことを第一とした。展示パネルにはイメージ画像として、六古窯日本遺産活用協議会が制作した「旅する千年、六古窯」の B2 サイズポスタを採用

し、本展が日本遺産に関連する事業であることを強調することとした。また、古代猿投窯から中世瀬戸窯、常滑窯等への影響関係を専門的な学説レベルではなく、一般的事項を平易に表現することにも留意した。六古窯以外の中世窯については、従来は常設展示されることが少なかった中世美濃窯の施釉陶器を含めて扱い、現行の六古窯区分について再考する視点を設定することとした。

中世展示の今次の改編においては産地配列を大幅に変更し、展示点数を従前の計 30 点から計 40 点へ増加させたが、既設の展示ケースと展示台は殆ど変更せず、総体として展示密度を上げることとした。なお、展示替作業は 7 月 1 日から 31 日にかけて、開館日の夜間や休館日に分割して実施した。

### 3. 展示構成・出品資料

#### 3-1 六古窯のはじまりー日本遺産「日本六古窯」の原点は中世にありー

##### [概説]

やきものの産地ー瀬戸（愛知県）、常滑（愛知県）、越前（福井県）、信楽（滋賀県）、丹波（兵庫県）、備前（岡山県）。六古窯は、中世から現代までやきもの作りがつづく、これら 6 つの産地の総称です。昭和 23 年頃、古陶磁研究家・小山富士夫氏によって命名され、平成 29 年春、日本遺産「きっと恋する六古窯ー日本生まれ日本育ちのやきもの産地ー」として認定されました。

これらの産地では、地域の陶土と伝統的な技術を生かして、それぞれ特徴あるやきものが制作されています。六古窯における伝統的な技術の基礎が形成されたのが、中世ー平安時代末期から鎌倉時代、室町時代のことです。瀬戸では釉薬をかけた四耳壺、瓶子や天目、平碗など、その他の 5 窯では釉薬をかけずに焼き締めた壺、甕、播鉢を中心としたやきもの作りを展開しました。

\*展示室では、上記和文を概説パネルとして設置するとともに、日本遺産事業の趣旨に則り、当館宮川学芸員が翻訳した英文をパネル化して併設した。

##### [内容]

猿投窯から瀬戸窯・常滑窯へ			
猿投 三筋文四耳壺	平安時代末期（12世紀）	高 23.0	No.0468
瀬戸 灰釉四耳壺	鎌倉時代初期（13世紀初）	高 28.5	No.5753
常滑 三筋文壺	平安時代末期（12世紀）	高 23.3	No.1492
六古窯のツボ			
瀬戸 灰釉瓶子	鎌倉時代（13世紀）	高 27.5	No.0690
常滑 甕	平安時代末期（12世紀）	高 32.8	No.1216
越前 壺	鎌倉時代（13世紀）	高 26.7	No.0001
信楽 壺	鎌倉時代（14世紀）	高 28.0	No.1548

丹波 瓶子	鎌倉時代 (13 世紀)	高 29.0	No.2263
備前 櫛目文壺	室町時代 (14 世紀)	高 36.0	No.0256
瀬戸			
灰釉直線文広口壺	鎌倉時代 (14 世紀)	高 37.4	No.5701
灰釉魚文盤	鎌倉時代 (14 世紀)	口径 30.4	No.1654
鉄釉印花文三足香炉	南北朝時代 (14 世紀)	胴径 11.5	No.2661
天目	南北朝時代 (14 世紀)	口径 12.2	No.1763
大海	室町時代 (15 世紀)	胴径 10.8	No.2438
常滑			
水瓶	平安時代末期 (12 世紀)	高 22.9	寄託No.0367
三筋壺	平安時代末期 (12 世紀)	高 24.2	No.1013
壺	鎌倉時代 (13 世紀)	高 37.8	寄託No.0364
小甕	鎌倉時代 (13 世紀)	高 19.9	No.1230
越前			
三筋壺	平安時代末期 (12 世紀)	高 23.3	No.0451
樹文三耳壺	鎌倉時代 (13 世紀)	高 35.0	No.0002
壺	室町時代 (15 世紀)	高 47.2	No.1671
信楽			
壺	室町時代 (14 世紀)	高 30.1	No.0972
檜垣文小壺	室町時代 (15 世紀)	高 22.0	No.1009
壺	室町時代 (15 世紀)	高 47.8	No.1201
丹波			
壺	平安時代末期 (12 世紀)	高 33.0	No.1860
壺	室町時代 (14 世紀)	高 42.5	No.0411
壺	室町時代 (15 世紀)	高 52.0	No.0412
備前			
櫛目鋸歯文瓶子	鎌倉時代 (13 世紀)	高 24.5	No.2215
播鉢	鎌倉時代 (14 世紀)	口径 37.0	寄託No.0389
櫛目波状文壺	南北朝時代 (14 世紀)	高 45.5	No.1743
大甕	安土桃山時代 (16 世紀)	高 91.4	No.0253

\*No.は、学芸課における資料管理番号である。

### 3-2 六古窯以外の中世窯－中世「六古窯」のパートナー/ライバルたち－

#### [概説]

中世日本では、八十か所以上のやきもの産地があったといわれています。

美濃（岐阜県）は、瀬戸（愛知県）に隣接するやきもの産地です。中世美濃では、施釉陶器の生産を継続的には行わないため、「六古窯」には含まれていません。しかし美濃は、愛知県の古代猿投窯、尾北窯や中近世瀬戸と関わりながら展開した、陶磁史上重要なやきもの大産地です。

六古窯や美濃以外のやきもの産地の多くは、地産地消を主とした小規模なものでしたが、渥美（愛知県）や珠洲（石川県）のように、製品が遠くまで流通した大産地もありました。しかし、陶土の品質などの課題で、六古窯との競争に敗れ、中世のうちに操業を終了しました。

なお戦国期には、瀬戸・美濃、常滑、越前、信楽・伊賀、丹波、備前のみが操業する、“六古窯の時代”となりました。

#### [内容]

美濃			
灰釉四耳壺	鎌倉時代（13世紀）	高 28.5	No.1762
灰釉四耳壺	鎌倉時代（13世紀）	高 22.5	No.1841
灰釉平碗	室町時代（15世紀）	口径 17.2	No.2715
渥美			
蓋付経筒外容器	平安時代末期（12世紀）	総高 31.3	No.2255
袈裟襷文壺	平安時代末期（12世紀）	高 37.4	寄託No.0084
灰釉壺	鎌倉時代（13世紀）	高 19.3	No.1329
珠洲			
叩文壺	鎌倉時代（13世紀）	高 35.6	No.2352
五輪塔	鎌倉時代（13世紀）	総高 22.8	No.0968
印花文双耳壺	鎌倉時代（14世紀）	高 24.2	No.0969

## 4. 付帯措置

### 4-1 古代・猿投窯展示

通史部門日本ゾーン古代コーナの展示は、平成 26 年 10 月の開始時には古代須恵器と施釉陶器の通史展示と、古代外国陶磁と日本陶器の比較展示によって構成されていた。その後、平成 30 年夏季特別企画展「猿投窯」の成果を常設展に還元すべく、同年 10 月に同コーナを猿投窯生産地編年の展示へと大幅に改編した。令和元年夏季の中世展示改編では、展示ケース壁面にイメージ画像パネルを六産地分掲示することとしたことから、展示会場に一定の一体感をもたせるために、古代猿投窯コーナには前年展示で制作利用した、時代別窯跡分布図パネル計 4 枚を掲示した。これにより、古代猿投窯から中世六古窯への展開がより視覚的に明示されることとなった。なお、パネル掲示の実施は令和元年 8 月 2 日である。

#### 4-2 近世初期・戦国期展示

中世施釉陶器から近世桃山陶器にかけての展示については、平成 26 年 10 月の開始時には中世施釉陶器展示部では古瀬戸灰釉製品展示と、中世外国陶磁と古瀬戸陶器の比較展示で構成するとともに、近世桃山陶器（桃山和物茶陶）への接続部には唐物写し茶陶として古瀬戸鉄釉製品を配していた。

本部分についてはまず平成 31 年 1 月に先行的な展示改編を行い、中世施釉陶器展示部を新たに灰釉と鉄釉製品を並置する内容に改めて、古瀬戸としての一体的な展示を行うこととした。また、近世桃山陶器への接続部には新たに戦国期の瀬戸・美濃製品を展示することとした。これは、大窯期（戦国期－安土桃山期）を近世初期として捉えて前後の時代と画する窯業考古学研究上の時代区分を、古窯陶磁資料展示と同様に採用する趣旨である。

これを受けて同年、桃山陶器及び江戸時代への接続部について展示改編が計画されたことに合わせ、戦国期瀬戸・美濃展示を拡充して「六古窯の時代－戦国期の陶器生産－」とし、戦国期六古窯の製品を紹介するコーナーへと改めた。これは、平成 24 年夏季企画展「戦国のあいち」第二展示部門「戦国陶磁」を探る－中世と桃山の狭間－の一部内容を常設展へ還元するものである。なお、展示改編の実施は令和元年 8 月 13 日である。

#### [概説]

##### 「六古窯の時代」－戦国期の陶器生産－

戦国期－15 世紀末から 16 世紀中葉にかけて、日本列島で陶器を生産していたのは、瀬戸・美濃、常滑、越前、信楽・伊賀、丹波、備前の六窯です。陶器生産に限って言えば、戦国期は“六古窯の時代”であったといえます。この時期、各産地では焼成技術や生産体制が転換したようで、高火度焼成による堅牢化と大量生産が実現しています。

瀬戸・美濃では施釉陶器、他の五窯は焼締陶器を量産しました。主に前者では外来陶磁をモデルとして造形を洗練させる一方、主に後者では中世陶器以来の素朴さと力強さを増進し、造形をより剛健なものとしします。これらの戦国陶器は列島内で広域的に流通し、外来の大陸陶磁や、列島各地で小規模生産された土器類とともに、戦国陶磁文化を形成しました。

#### [内容]

施釉陶器			
瀬戸 鉄釉四耳壺	戦国期（16 世紀）	高 43.0	No.2826
瀬戸・美濃 灰釉・鉄釉皿、天目	戦国期（16 世紀）		No.1543
美濃 鉄釉徳利	戦国期（16 世紀）	高 25.0	No.1614
焼締陶器			
常滑 壺	戦国期（16 世紀）	高 38.4	No.1088
越前 双耳壺	戦国期（16 世紀）	高 38.4	No.0167

信楽 花文壺	戦国期（16世紀）	高 45.0	No.1741
丹波 壺	戦国期（16世紀）	高 42.4	No.0415
備前 櫛目波状文壺	戦国期（16世紀）	高 42.0	No.2216

## 5. おわりに－今後の課題－

本展示の構成にあたっては、中世を 11 世紀末ないし 12 世紀初から 15 世紀までと設定し、16 世紀代の資料については近世初期展示において扱うことを目指した。しかし、中世コーナーの展示替作業の大部分を筆者一人で行ったことから、備前大甕（安土桃山時代、No.0253）については大形かつ重量物のために展示を替えることができず、中世展示として完成させることができなかった。本資料を例えば備前大甕（南北朝時代、No.1740）に替えることが、早期に実現したい課題である。

また、本展示実施作業の一部は筆者指導の下、博物館実習生（大学生）や職場体験生（中学生）が担ったが、そうしたことについては陶磁美術館としては全く情報発信しなかった。教育普及活動に関しては、展示事業との関連付けや成果の情報発信等について陶磁美術館では近年、様々に取り組みつつあるものの、さらに拡充の余地があるように思われる。所蔵資料を用いた常設展こそが博物館展示事業の根幹であり、今後その一層の充実を図るために、本展を中核とした事業展開を行っていきたい。

なお、本展が扱う「日本遺産」は、近年の観光行政、文化行政における代表的な施策の一つである。近年の博物館をめぐる行政の動向については、例えば青木豊ほか編著『博物館と観光』（雄山閣、2018 年）に詳しい。愛知県においては、平成 3 年度から知事部局が県立の美術館や陶磁美術館（当初は陶磁資料館）を文化芸術施設として所管する一方、文化財行政は教育委員会が司ってきたが、令和 2 年度からは、知事部局である文化芸術課が従来の文化芸術行政に合わせて文化財行政も所管する。これは文化財を文化芸術の振興や景観・まちづくり等の推進に一層活用することを企図するもので、地域の文化財を豊富に有する博物館が、当該地域の文化遺産群について学術的根拠に基づいて情報発信することで、住民や旅行者が地域について理解を深めることが期待されており、本展もその一翼を担うものである。ただし、こうした博物館行政下においても、博物館が社会教育機関・施設であることに変わりはなく、公共的で現代的な課題の解決、社会にとって望ましい価値を意識した教育を引き続き実践していく必要がある。



1 「六古窯のはじまり」全景（壁面展示ケース、北から）



2 「六古窯のはじまり」導入部：（左）「猿投窯から瀬戸窯・常滑窯へ」・（右）「六古窯のツボ」





3 「六古窯のはじまり」各論：(左)瀬戸・(右)常滑



4 「六古窯のはじまり」各論：(左)越前・(右)信楽





5 「六古窯のはじまり」各論：(左)丹波・(右)備前



8 「六古窯のはじまり」全景（南から）



9 「六古窯のはじまり」と「六古窯以外の中世窯」の接続部  
 (手前覗き型展示ケースは、古窯陶磁資料展示コーナー)



10 「六古窯以外の中世窯」全景：(左)美濃・(中央)渥美・(右)珠洲  
 (左ケース外パネルは、イベント「日本六古窯トークセッション」等告知ポスター)





11 古代コーナ(猿投窯)全景 (南から)  
(手前覗き型展示ケースは、古窯陶磁資料展示コーナ)



12 古代コーナと中世コーナの接続部  
(展示室順路としては、左手前の古代から、中央奥-右奥の中世へと進む)



13 「六古窯の時代」全景（東から）



14 「六古窯以外の中世窯」と「六古窯の時代」の接続部  
（展示室順路としては、左手前の中世から、中央右奥-右中央の戦国期へと進む）